

ぬ時代でした。

今や満ち足り過ぎる良き時代、暖衣飽食、世界中の欲しい物が即座に手に入る時代です。この豊かさが、尊い失われた多くの命の賜物であることを忘れないように、また悲惨な戦争を二度と起きないため、戦争を知らない若い世代に、自由と自我の区別、共同の社会、戦争の悲惨さを理解させるように、我々の苦勞の体験を語り継いで行かねばならない思います。

海軍予備学生の思い出

石川県 松村 靈 俊

終戦の年、昭和二十（一九四五）年の三月二十四日、二十三歳の小生は、万葉の防人が「今日よりは顧みなくて大君の醜の御盾と出で立つ我は」と歌ったように、郷党に決別して海軍予備学生として館山海軍砲術学校に入校したのであった。今は八十四歳と老いたが、六十一年前のわずか五カ月間にすぎぬ予備学生の頃が、生涯忘れ得ぬ懐かしい思い出となっているのである。

旧制中学卒業に際し、小生は海軍兵学校を志望したのであったが、能登の寺の一人息子であったために、兵学校を断念して教員になるようにとの門徒の意向に沿って、広島高等師範学校に入学し、次いで広島文理科大学史学科に進んだのであった。その大学三年の半ば、県の東部竹原町の三井精錬工場に勤労働員されて潜水艦の蓄電池用の鉛を

精錬していたのであった。

これより先き、昭和十八年の秋には一般の大学生は徴兵猶予が撤廃されて、勇躍「学徒出陣」したのであったが、小生の広島文理大と東京文理大の二校だけは旧制中学校や旧制高等学校の教員を養成する学校ということで徴兵が猶予されて昭和二十年を迎えたのであった。

しかるに、この間、緒戦の大勝利にも拘らず、海軍はミッドウェイの敗北以来、数次の海空戦に敗北を重ね、殊にレイテ海戦で巨艦「武蔵」を失って、米機動艦隊に対しては伝統の大艦巨砲主義も意味をなさぬことをさとられ、以後は無謀な特攻作戦をとらざるを得なくなっていた。連合艦隊司令長官山本五十六、古賀峯一両大将の戦死と殉職は光榮ある帝国海軍の末路を暗示するものだったのである。

一方、陸軍もまたアッツ、ガダルカナルの敗北以来南方各地の占領地を奪回され、インパールで失敗し、ルソン島を失い、サイパン、硫黄島で玉

砕して、やがて沖縄までうかがわれるほどの状態になっていた。

加えて、欧州戦線でも盟邦イタリアは既に降伏し、ドイツも米英軍のノルマンディー上陸を阻止できず、レニングラードでのソ連軍との戦いに敗れて、東西呼応しての連合軍の攻勢にベルリン陥落が迫っていた。

こうした情勢になって、サイパン失陥を機に開戦以来、国務と統帥権を一手に握って戦争指導に当たってきた東條内閣は総辞職し、後継の小磯内閣も戦局の打開に苦しんでいた。以上のように戦局が窮迫して、本土決戦、一億玉碎の声があがるようになって、二月四日、陸軍省令で小生ら文理大の文科系学生の徴兵猶予が停止され、出陣命令が出たのであった。この時、小生には金沢の戦車連隊に入営すべしとの令状が届いたが、小生はこの令状には従わず、海軍予備学生となることを選んだのであった。

陸軍でも幹部候補生となっても士官となる道が

開かれていたが、初めは二等兵から出発するのであり、試験が少々あったが、予備学生となれば当初から士官候補生となれたからであった。そのため、この時陸軍に入った者も少数はいたが多くは予備学生となった。その中には大竹の潜水学校や鈴鹿の航空隊に入った者も二、三人いたが、大部分は館山砲術学校に入ったのであった。

館山砲術学校に入ることが決まって、小生が竹原を引き上げ、数日の自宅滞在後、家郷に決別して列車を乗り継ぎ、上野駅についたのが前記のように三月二十四日であった。その上野駅が薄汚い浮浪者と子供でいっぱい、見渡す限りの東京が焼野原になっているのに驚いたのであった。サイパンを飛び立ったB 29の三月十日の猛爆撃の結果だったのである。

房総線に乗り換える間、休む場所もないまま西郷さんの銅像の前に座り、母が工面して作ってくれた握り飯を一つ頬張ったところ、どこからか浮浪児達が蝟集^{しゅうじゅう}してきて残りを全部もぎとられてし

丁寧^{ていねい}に学校生活についての説明があつて、我々が陸戦隊要員であることや、その他の日常の注意事項などを教わつて、海軍は案外やさしいところであると思つたのであつたが、それは主として「教員」と呼ばれる下士官の説明に当つたからであり、士官候補の我々より自分が下であつたためだつたことが後になって分かつたのであつた。教員ではなくて「教官」と呼ばれるのは少尉以上の士官だつたのである。三日が過ぎて四日目になると態度が一変して厳正な規律が求められ、濃紺の一種軍装と緑黄色の三種軍装が支給され、軍刀を注文するよう命ぜられた。

それから数日後、平素着用する三種軍装で校舎の傍らに立っていると、「歩調トレ、頭右」と号令して通り過ぎる兵隊の一隊があつて怪訝に思つて回りを見ても、小生の他には誰もおらず、小生に對する敬礼であることが分かつて真赤になりながら答礼したのであつた。それは略帽に将校の二本筋がついていたからであつたが、それからは小

まつた。まるで餓鬼の群れだつた。

夕焼けの海辺を眺めながら房総線を南下して館山駅に着いた時は暗くなつていた。休む間もなく、大声で「今着いた予備学生集まれ」と呼ばれ、集まつた二十人ほどが教官に引率されて夜の山道をたどつて砲術学校に着いたのである。

その晩は生まれて始めて後日酷い目に会うことになるとは知らず、ハンモックにくるまつて寝たのだったが、翌日起きてみると砲術学校は広い野原に独立する木造校舎で、野原には落花生やらササゲが植えてあり、遠くには乳牛が草を食^はんでる姿がみえて、戦争さえなければ長閑な桃源郷だつた。

その日のうちに二百人ほどの予備学生全員が集まつた。主体は広島と東京の文理大生であり、同じ研究室の服部君やら一年下の田中君の顔もみえて心強かつたが、小生らより二つ三つ若くて徴兵年齢に達した一般大学生も混ざつていた。

それから三日間はオリエンテーションで、親切

生の方から隊列を避け、平気で答礼するようになるのには一カ月ほどかかり、略帽に恥じぬよう士官候補生としての修練の必要を痛感したのであつた。

軍装の支給と同時に我々は第六期予備学生ということになり、学生隊の編成が行われて、小生は第十一分隊第一区隊第一班に属することになった。分隊は陸軍の大隊、区隊は小隊に相当するもので、一班は約十人、区隊は四班、分隊は五区隊から成り立っていて、分隊長は長身で兵学校出身のスラバヤ沖海戦で駆逐艦の砲術長として敵の軽巡洋艦を撃沈したといわれた明晰果断の三浦大尉、第一区隊長は予備学生出身で中肉中背の好人物で、区隊長の中では一番評判の良かった関中尉であつた。班長は我々の中から選ばれた。分隊番号の十一というの十一個の分隊があつたのではなく、番号を十代から始めたもので、我々予備学生隊は一個分隊だけだつた。

我々の他に兵学校生徒の一隊があつて我々と同様の陸戦訓練をうけていたが、我々とは関係がな

かった。

課業は早速始まった。朝六時五分前に「総員起し、五分前」とアナウンスが流れると、皆身がまえて衣服を整え、「総員起し」の号令で一斉にハンモックから飛び降り、吊り床をロープで固縛して、一分か二分間の間に格納庫に納め、洗面して早い者順に営庭に整列して「軍艦旗掲揚、挙手敬礼、訓辞、海軍体操か駆足、そして朝食」ということになるのであったが、誠に迅速な行動が要求されたのである。

元來行動の緩慢な小生が人並みに行動できるようになったのはこの朝の予備学生時代の訓練のおかげで、殊に海軍の「五分前精神」は何事でも周到な事前準備をする癖をつけてくれたのである。要領の悪い小生はいつもハンモックの固縛には苦しんで、中から毛布がはみ出した罰にそのハンモックをかついで営庭を走って回らされた苦い経験があるが、それも今日の整理整頓癖に役立っていると思う。

ことが予定されていて、それまでの五カ月間で一応の海軍士官としての知識を習得させようとするものであったから誠に忙しい速成教育であって、今は全く身についていないのだが、砲術の理論から航海術、天測、兵器概論、航空術、軍の法学といったもので陸戦要員の我々にとっては迂遠で理科的な知識を必要とするものが多く、文科出身の我々は理解に苦しんだのであった。

中でも、数学まであって若い軍医中尉が講義してくれたのであったが、旧制中学以来全く数学から遠ざかっていた小生には、中尉の説く高等数学はいくら努力してもついてゆくことができず、二回の試験とも生まれて初めての赤点をとって劣等生の屈辱を味わったのであった。

後年、高校長となってから新米の教員を集めてこの経験を話し、君達は劣等生の悲哀の分かる教員になれと訓辞したものである。

午後の実習は、陸戦要員である我々には陸戦の訓練が多かったのは当然であるが、陸軍のような

ただ、辟易したのは駆足で、後年心臓病を患った小生は競走でテープを切ったことが一度も無いのであるが、砲術学校の駆足は房総半島南端の野島崎近くの布良の電波探知機の基地まで約五キロを往復するのだった。レーダー開発の遅れが日本海軍の苦戦の原因だったのであったが、近年ようやく開発されてB 29の関東来襲を探知するために布良に設置されたのであった。この駆足では小生はいつも落伍して、「コラッ松村学生、早く走ランカ！」と叱咤されたものだった。

我々予備学生の食事は、朝、中、夕とも下士官や兵とは別の食堂ではあったが、随分多くの麦の入った麦飯で、副食も貧しく、士官食堂の白米に贅沢な副食とは格段の差があった。陸軍では兵も士官も一緒であると聞いたが、海軍の差別は感心しなかった。

朝食後の課業は午前中が座学で、午後は実習であった。以前の予備学生は半年以上の期間があったらしいが、小生らは九月一日に少尉に任官する

規模の大きい野戦の訓練ではなく、従来の陸戦隊のように市街戦とか島嶼防衛戦とかを想定した局地戦闘の訓練が多かったから、中学や大学での学校教練に毛の生えたようなもので特別難しいものではなかった。

ただ海軍らしいと思ったのは敵の上陸を阻止するための水際戦闘訓練で、三浦半島の各地に点在する坑道陣地には、湘南海岸の水際に砲口を向けた機関砲の砲座が設置されているのを見学する機会があって、その際、関区隊長から「貴様フハヤガテコンナトコロヲ守ルコトニナルンダ」と云われたものであった。

その他、暗夜に磁石一個を与えられて、目的地に到達するのを競う訓練もあったし、手旗の訓練もあった。小生は野外で行った手旗信号は得意になったが、室内で訓練を受けたモール信号は苦手だった。特に夜間の発火信号では光の残像が尾を引いて判読を誤り、「松村学生、データラメ云ウナ」と叱られたものだった。

楽しかったのはカッターの訓練で、館山港に砲術学校の埠頭が在り、そこから漕ぎ出して二時間ほどで帰るのであるが、関区隊長が乗ってくれて、途中で漕ぐのを止め、快い海風を受けながら明るい区隊長の話に開放感を味わうことができたのである。ただ艇長を命ぜられた小生はよかったが、漕ぎ手の諸君は拳に血豆をつくり、入浴の際は赤くなった尻にヨードチンキを塗って、お互いに団扇で煽ぐという珍風景を演じたのは気の毒だった。

こうした訓練を受けていた六月初旬、我々と同じ陸戦訓練を受けていた兵学校の一隊が少尉に任官して、第一種軍装に身を固め、黒鞆の軍刀を携えて、凛々しく任地に出発するのを帽を振って見送ったのであったが、我々もまた、館山での前期の訓練が終わって、六月の中旬、浦賀水道を掃海艇で渡って横須賀砲術学校に向かったのであった。

横須賀砲術学校に入る際には長いトンネルがあって、そこを通れば「軍紀の風が吹く」といわれ、厳正な規律で海軍将兵を練成する再教育が機関で

あった。

校舎はやはり木造ではあったが、館山よりは大規模で、周辺には高射砲や機関砲の砲座が幾つも据えられており、弾薬庫もあった。周辺には多数の坑道が掘られてあって退避や貯蔵用となっている。その中には我々予備学生用の壕となっているものもあったが、この学校に籍があるということが高松宮殿下の壕もあるということであった。

学生隊の編成は我々陸戦分隊は館山のままで、分隊長は三浦大尉、第一区隊長は関中尉であったが、横須賀では我々の陸戦分隊の他に、高射砲や高射機関砲を専門とする対空分隊や毒ガス部隊の化兵分隊があった。この対空分隊があっても不思議ではないが化兵分隊があるのには驚いた。海軍に毒ガス部隊があるとは思わなかったことであつたが、我々も何度か防毒マスクをつけて催涙ガスの中で演習させられたし、全身ゴムの衣服をまとってイベリットに対応する訓練を受けたりしたのであった。

対空分隊や化兵分隊には予備学生もいたようだが、一般将兵の研修生もいたらしいのである。また、三分隊の他に多くの将兵が周辺の砲座に配置されていて、これら三分隊と他の全将兵を統括した学校長は少将閣下であり、学生隊長は大佐であった。

横須賀に移って、変ったことで嬉しかったのは二段ベッドになって、ハンモックの苦難から開放されたことと、午前が座学で、午後が実習であることは館山と変りなかったが、午前の座学の中で数学がなくなつて、もう劣等生の屈辱を味はなくなつてもよくなつたことであつた。

午後の実習では館山の時のような三八銃を携えての局地戦の訓練はほとんど無くなって、弾薬庫での弾薬の見学とか、ようやく開発したロケット砲を見学して驚いたりしたことなどがあつたが、二連装の対空機関砲と短一二センチ砲の操作を訓練させられたことが新しく、だいいじなことであつた。

対空機関砲では、たまたま実際に上空を通過した米偵察機を狙つて射撃する機会があつたが、慌ててしまつて小生の砲座からは一発の弾も出なくて恥をかいたのであつた。これはしかし対空分隊員ではないとして許されるかもしれぬが、短一二センチ砲は本来戦艦の副砲や、巡洋艦とかその他の艦で用いている一二センチ砲の長い砲身を短くして、地上の陸戦のために造つたらしいので、陸戦要員である我々は操法に習熟する責任があつたのである。ところが我々には、難しくて失敗するものだから、教えてくれる教員が苛立つて我々を叱れないため、救助の兵隊を打擲ちやうちやくすることがあり、兵隊に申し訳なく思つたことがしばしばであつた。

また、カッターの代わりに水泳訓練があり、港外で低速で動いている特殊潜航艇の周りをグルグル回つて嘲あざけり、平素の鬱憤うっぷんを晴らしたりしたものだった。ハワイの緒戦に登場した二人乗の潜航艇の「嵐部隊」と呼ぶ基地が学校の近くにあり、特

攻兵器であることを嵩かさにきて傍若無人の態度であったのである。

七月初旬に横須賀軍港を見学する機会があった。日本海軍第一の大軍港であったが、軍艦の姿が余りにも少ないのに落胆したのであった。軽巡か駆逐艦らしいのが五隻ぐらい、急造の海防艦が六隻で、あとは掃海艇か魚雷艇が十五隻ぐらいで、空母があるはずはなく、港を埋めて蟄集していたのは、二人乗りの木造特攻魚雷艇だった。

そうした中で一隻ポツネンと岸壁に横づけになっていたのが戦艦「長門」であった。「大和」「武蔵」が就役するまでは「陸奥」とならんで連合艦隊の旗艦となったこともあり、日本海軍の儀表であった三万トンの大艦が、全身を網でつつみ、網の間に板をはさんで迷彩を施し、副砲をすべて撤去して対空兵器に代えている姿は、もはや外洋に出て闘う意志を放棄した姿であった。横須賀軍港にはもはやかつての光榮ある連合艦隊の面影はなかった。

が、それだけのことで、一緒に会ったこともなかったし、予備学生として出征すると話したこともなかった。女の一念というものか、よくぞ小生の所在を確かめて手紙をくれたものだと驚き、嬉しかった。手紙には慰問の言葉が綴られていて、それ以上の言葉が書けるはずもない時代であった。

分隊長から手紙をもらう際、拳骨も一発もらったがなぜか痛くはなかったし、かたわらの区隊長はニヤニヤと微笑んでいた。小生は心の中で涙しながら「自分は出征した以上死をも覚悟しなければならぬ身である。貴女の志は誠に有難いが、これ以上手紙をくれないで貴女は学業に励んで下さい」と返事を書き、それからは手紙はこなくなつたが、後で風のたよりに彼女は卒業して郷里の女学校の先生になったと聞いた。今は名前も顔も思い出せないが、戦争の頃の淡い青春の一駒であった。

その後間もなくの七月十七日、小生は初めて敵弾に身をさらす戦場の恐怖を経験したのであった。

こうした横須賀軍港を見るにつけても制海権も制空権も失った日本海軍の前途に暗然とし、館山に入校したと同じ頃始まった沖縄の戦いが、陸軍の悲劇的な死闘の甲斐もなく横須賀に移った頃に遂に玉砕し、果てたとの話しが耳に入ってくるにつけても、次はいよいよ本土上陸かと覚悟して日々過ごしていった。

七月中旬のある日、突然の三浦分隊長から小生に対する呼び出しのアナウンスがあつて、何事かと不審に思いながら恐る恐る出頭すると、「松村学生、貴様マダ娑婆しやば気が抜ケテオランジヤナイカ」と一喝されて渡されたのは広島女子専門学校の一女子学生からの手紙であった。その女子学生は彼女の広島女専が、小生の下宿の宇品から大学に通う道の途中にあるところから、互いに通学する際にすれちがう女子学生の一団があつて、小生と目があう度ごとに朋輩からツツかれて顔を赤らめていた純真じゆんぜんそうな女性であった。

後から石見益田出身の子であることが分かった

沖縄戦にケリをつけたアメリカのハルゼー提督の機動艦隊が太平洋岸を総嘗めして北上し、横須賀をも襲ったのであった。

当日、見張り役を命ぜられた小生は、来襲するグラマンの大群に驚いていると、バリバリと機銃掃射の弾丸がメートルも離れぬ地面を走り過ぎ、咄嗟に身を伏せたが生きた気がしなかった。何度も執拗に迫るグラマンが機首をたてなおす隙をついて、一散に駆けて五十メートル先の学生壕に逃げ込んだのであった。九死に一生を得たのであった。

訓練に明け暮れて、小磯内閣が沖縄戦で総辞職し、後継ぎの鈴木貫太郎内閣が一億玉砕を叫びつつも和平も摸索し始めていることを知らないでいた我々が、重大な衝撃を受けたのは八月六日の広島と、続く長崎の原爆だった。六年を過ごした母校と、想い出のある広島町の隅々まで灰燼かいぜんに帰し、多くの師友が犠牲となったことに暗然としたのであった。

遂に、八月十五日、玉音が雑音のために、初めは中立条約を破って満州に侵攻した暴虐なソ連に対する宣戦布告かと思つたのに、やがて敗戦のお言葉と知って、ただただ滂沱^{ぼうた}たる涙であつた。

翌日からの厚木航空隊の抗戦ビラや、家郷を急ぐ脱走兵のために生じた混乱の中に、八月二十七日、我々予備学生隊に、九月一日の任官を前にして解散命令が出たのであつた。

その前日、学生隊長大佐が我々に「君達はやがて教壇にたつたら鎌と鍬を忘れぬ若者を育ててくれ」と訓辞し、やがて割腹して海軍病院に運ばれるのを悲痛な思いで敬礼して見送つたのであつた。正に憂国の訓辞であつた。

解散の日、復員兵で雑踏する上野駅から敗残の空しい思いを抱きながら無蓋貨車に乗って帰郷し、しばらくは価値観の転換した世相に悩んだが、やがて三十五年の教員生活を経て寺の住職となり、今はそれも若院にゆづつて老がいの身を養つていくが、腰痛に苦しみながらもなお鍬を捨てずに畑

に出ているのは、横須賀砲術学校予備学生隊長大佐の遺訓を守っているからである。